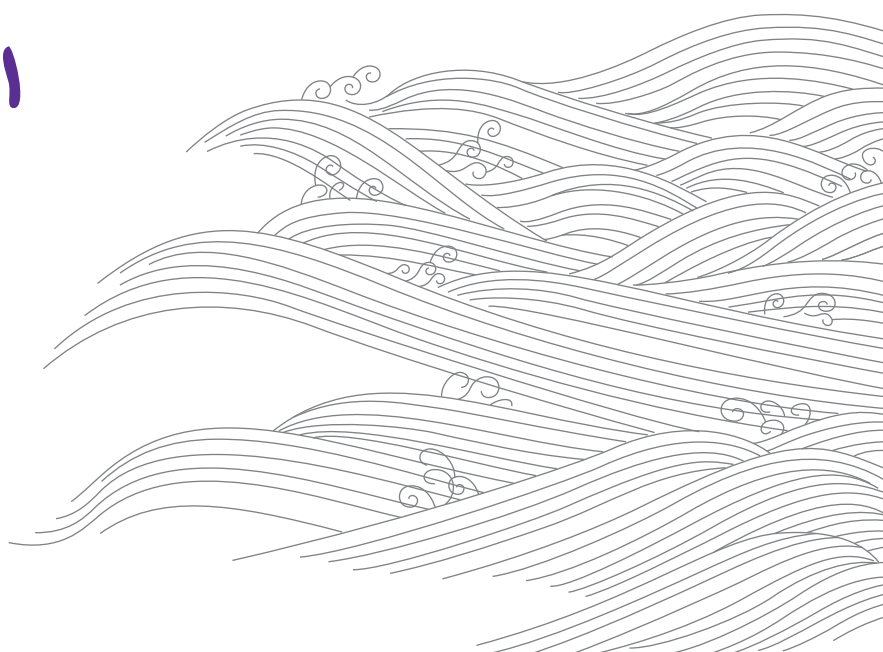


# 茗溪



## 特集

- 新春対談 明日を語ろう
- 茗溪学園創立30周年

グラビア	01
特集Ⅰ 新春対談 明日を語ろう	02～05
特集Ⅱ 茗溪学園創立30周年	06～09
第八回(平成21年)茗溪会顕彰	10～12
平成21年「追悼のつどい」	13
茗溪会/秋の公開講座から	14～16
平成21年秋の叙勲	17
著書紹介	17
桐の葉のつどい	17～19
季刊誌「茗溪」などを確実にお届けしたい	20
追悼録	21
筑波大学大塚地区	
E・G館想い出会の開催について	21
本部だより	22
編集後記	22

meikei

正月  
2010  
No.1064



山田学長

西野理事長

# 新春対談 明日を語ろう

(P. 2 ~ 5 参照)

特集

I  
II



# 茗溪学園 創立30周年記念

(P. 6 ~ 9 参照)

## 追悼のつどい

(P.13参照)



高見邦雄氏



幸田弘子氏

## 第8回 (社)茗溪会顕彰

(P.10~12参照)

## 公開講座の講師のかたがた

(P.14~16参照)



中込 璋氏



藤原保明氏



# 新春対談 明日を語る

国立大学法人 筑波大学長 山田 信博氏  
 社団法人 茗溪会理事長 西野虎之介氏

筑波大学長山田信博氏は学長就任後初めての正月を迎えられます。茗溪会理事長西野虎之介氏は3回目の新春を迎えられました。それぞれに大きな課題を抱えながら「明日に向かって」力を合わせ、歩まれようとされる、その思いを話し合っていました。

## 新しい年 新しい一歩

**理事長** 明けましておめでとうございます。

**学長** おめでとうございます。

**理事長** 学長にとりまして、今年には昨年の就任以来、初めての新年を迎えられたということになりますね。

**学長** そうなります。就任以来、早いものでもう十か月が経ちました。

学長に就任してからは、第二期中期目標の策定作業や、膨大な資料の掌握、各関係方面の方々との接触と、瞬く間の十か月でしたが、就任時の本誌の春号でも申しあげたことですが、筑波大学の歴史には二つの側面があるということですが、いよいよ確かなものとして心に刻みました。

その一つ目は、言うまでもなく、師範学校、高等師範学校、東京文理科大学、東京教育大学、図書館情報大学をはじめ、前身諸学校により築かれた140年近くの長い歴史を持つ伝統校であるということ。

二つ目は、それまで培ってきた広範圏の研究、教育を踏まえて領域をなお拡大して、新構想に基づく大学を、この地・筑波に新天地を求め、研究学園都市の中心的な存在として創設してきたこと。この二つの側面は長い伝統の中で育てられて来られた同窓の先輩方の努力の結晶

であるとともに、関係する教職員や学生諸君の協力の成果であるということです。

この事実には、就任以来いろいろな場面でお会いする諸先輩や関係者のみなさんのお話からも確かめられることでした。他の大学のみなさんからも「尊敬」の眼差しを向けられ、これは就任前に考えていた以上に実感しているところだと思います。このことは感謝するともに、誇りにさえ思っていることだと思います。大学を預かる私としては、改めて重大な責任を感じているところです。

## タテ糸とヨコ糸との結節点に立つ

**理事長** 先程の学長のお話にもありましたが、私どもの前身校は歴史が古く、東京・神田駿河台の神田川沿いの徳川幕府の学問所であった昌平黌跡に、近代化日本の指導的な人材養成のために官営の教員養成機関として創設されたものです。そのため、いまでは国宝となっている江戸時代の狩野派の絵画等も、わが大学に継承されているわけです。

**学長** それはいま、東京医科歯科大学のあるキャンパスで、そこを中心に広大な敷地を持つていたわけですね。  
**理事長** いまのお茶の水女子大学も創設当時は我々と一緒でした。

**学長** わが大学は、明治初年にすでに「近代国家における新構想大学」としての先鞭をつけていたのです。

私は、これらの長い伝統に支えられ培われて来た教育と研究の場から、思いもあらたに新しい場所での新構想大学を造り出したエネルギーをタテ糸とみるのですが、これは、これからの押し進める大切な力になると思います。

そして、このタテ糸により合わされるように、新しい動きが出てきたわけです。

**理事長** 関係する多くの人々の目が注がれている中で、新学長の手によって、第二期の中期目標・計画の基本方針と、それに基づく項目ごとの重点目標が示されました。

**学長** 大学の「建学の理念」からみましても、学群や学系という新しい組織体に改めたことと同時に、狭い視野や組織にとらわれることなく「開かれた大学」という概念が重要な要素として加わり、その学群体制も、その後、わかりやすい組織に変えて参りましたが、その考え方の基本は、第二期の中期目標においても引き継がれております。

この「開かれた大学」ということは、この頃になって他の大学でも言われ始めて来ておりますが、先見性という点から見ましても、わが大学は他の追随を許さないものがあります。

しかも、当時と比べて社会の変容も甚だしく、今日では閉塞感や疲弊感すら出ております。それを打ち破るためにも、私たちは恵まれたリソースがありますので、そのリソースを活用して適切な配分措置を再考して行きたいと考えております。

その上、四十年前の「新構想大学」に加えて、今日では大学院体制や、国立大学法人化という重い課題も加わっておりますので、そのような課題も十分に踏まえて、研究・教育の体制造りを再構築しなくてはいけないと思っております。

そのためには、いま申しましたままでの体制に合わせて、国際化という概念や財務や経営評価等という点を、大学本部を中心にして各部署を横並びに、しかも出来得ればそれを総的にマネージメントやプロデュースする部署を置いて、そこにヨコ糸を通すようにした有機的な連動可能な組織にして行きたい。そのヨコ糸と先程のタテ糸との「結節点」に立つもの、それが明日を指して前途に希望を持って研究や学問に励む有為の学生の一人一人であり、また、それをサポートする教職員であるのだと思います。また、同じ場所に、同窓である先輩や大学の諸活動を理解し応援、後援して下さる、地域をはじめとした一般社会の方々にも一緒に立っていただきたい。そんな組織づくりがこれからの大きな課題の一つだと思っております。

特に、研究面では大学院の充実に合わせて、新しいシステムをトップレベルの水準として集中的にまとめあげて行きたいのです。

**理事長** その証しの一つになる事業として、毎年、筑波の地に一本化した「茗溪筑波グランドフェスティバル」を共催して、それぞれの年にその年のテーマを決めて、在学生、教職員、同窓の先輩との交流を深めておりますね。

**学 長** みなさんのご協力で、その内容も年々充実し盛大になって来ております。ヨコ糸、タテ糸の結節点の具体的で確実な現れの一つと言えましょうね。  
そのようなタテ糸やヨコ糸をより合わせてこそ、ノ

ベル賞を受賞された先輩方が複数おられるような質の高い雰囲気づくりも出来ると思うのです。

最近でも、国のレベルで世界最先端研究者として認められた30人のうちの2人が筑波大学関係者です。

一人はロボットスーツHALで有名な山海嘉之教授、もう一人は海外に出ておられる柳沢正史教授です。

### 連携の輪を一層強めよう

**理事長** 先程、学長から私たちの前身校や茗溪会のことについて、深いご理解ある発言をしていただき感謝しております。

私たち茗溪会関連としましては、社団法人茗溪会と財団法人筑波学都資金財団、それに学校法人茗溪学園の三人がございしますが、学園以外の二人法人は昨年十二月から、国の認定公益法人とするか、当方で手続き上の内容を整えて認可を求める一般法人とするか、これからおよそ四年間の猶予期間中に選択が求められておりまして、昨年の通常総会でも資料を添え詳しく説明をしましたが、理事会内に委員会を設けたり専門のコンサルタントをお願いして鋭意検討を進めているところです。

**学 長** 茗溪会は、全国的な支援組織を持つ、私どもとしても「頼りになる」同窓会組織として同窓生の集う大事な拠点と思っておりますし、今後とも、私ども大学と連携を密にして進んでいってほしいものと思っております。

**理事長** 茗溪会も、大学との長いお付き合いの中では、新構想による大学づくりの時、騒然とした時代の中にあっても、どんな困難な状況下でも、両者が手を携えてその実現に協力してきたという実績があります。時には、あるいは疎遠かなと思われる面もかいま見えた時期もありましたでしょうが、少なくともこれからは、大学側も国立大学法人という自立的な運営が求められる状況下でもあり、茗溪会も行政的な背景の中で新しい体制が求められているという点からも、両者が新しい認識と新しい組織を模索しながら、その団結力を一層強固なものにし

て行かなくてはならないと存じます。

その「さががけ」として、茗溪会が公益事業として主催する公開講座を、講師の紹介や出演依頼等も合わせて大学の後援・協力を得て、東京の茗溪会館と共に、3年前からは筑波でも大学会館を会場に開催しております。

これには、財団や茗溪会筑波事務所の職員の協力は勿論のこと、大学側からも事務局や大学会館のスタッフをはじめ学生諸君の献身的なお力添えを得ておりまして、感謝しているところでございます。その上、地元の当局や諸学校、マスコミの後援や協力もいただいて、おかげさまで年々評判も高まって、地元だけではなく周辺各地からもお客様がお出でくださり、私たちの所期の目的も達成されてきておりまして喜んでおります。

**学 長** 出演される講師もそれぞれにハイレベルの方が多く、ステージ操作等に関しましても、具体的に協力



西野理事長

山田学長

してくれる学生には良い学習の場にもなるということで、私どものスタッフも一生懸命にご協力しているようです。  
**理事長** 当会が主催いたします公開講座も今後は社会貢献という観点からも、多くのご協力をいただきながら進めて行きたいと思っております。よろしくお願いいたします。

また、大学院生を含めて就職を希望する学生のために大学が主催する毎月の就職情報や活動に関する講演会などへの社会人講師の紹介をしております。毎年3月には3日間連続開催する就職受験対策研修会では、大学院生や大学生のうち、教員志望者を対象に対してはアドバイスや相談、仲間同士のディスカッション等の自主的な活動をプッシュしております。

大学会館にある茗溪会筑波事務所では、毎週、日時を決めて、財団の二人の所長が、就職希望者サポート等をしております。

**学 長** 有り難いことです。是非、その実践は続けていくてくださいます。

**理事長** 一方、現在茗溪会の会員数は、全国で五万四千人を数えておりますが、そのうち、現在では、三分の二以上が筑波大学の卒業生になっております。その中で、大学院で学んだ方々の入会も年々増えて来ております。

**学 長** この四十年間の歴史をもう一つの観点から見ますと、「大学院」への比重がかかって来たことだと思えます。現在、大学生は一人、それに対して大学院生は七千人おります。私は、この大学院生を同窓ネットワークに組み込んで行きたいと思っております。そして、茗溪会と一緒に、大学院生の社会的活躍を考えて行きたいと強く願っております。

是非、同窓生の共通のネットワークや共通の「ふるさと」を、みんなで持ちたいですね。

**理事長** 茨城県にも同窓生は三千五百人おりますよ。このような現状を踏まえ、単に、茗溪会の会員だけではなく、いまある他の形態の同窓生の組織をはじめ、新旧の父母や関係する教職員またはその経験者、それに地元をはじめとする全国の理解者のすべてを吸合した、



山田学長

例えば校友会とか学友会といった、新しい組織化を図ることなども目指して行くべき時に来ているのだとも思われます。

**学 長** 新年に際して、大きな夢を描いてみるのも必要なことで、是非実現したいものですね。

### 広範囲な地域性を大切に

**理事長** 私どもの立場からも、大学やその周辺の方々とも一層、連携を深めて参りたいと存じます。

**学 長** その上で考えてみますと、国立大学法人化ということは、地域や同窓を含めた「スーパード」大学として世界にも情報を発信する体制づくりが重要だと思えます。

**理事長** 私どもの季刊誌「茗溪」の前回に発行しました秋号では「地域医療を進める」という特集記事を掲載しましたが、そこでは、関係者の協力をいただき、各地域の中・小規模の病院が地域医療に取り組んでいる実際の様子を紹介しました。また、それに合わせて、地域医療に対する筑波大学の取り組みや茨城県水戸市に開設された、民間病院と筑波大学の協定による大学のサテライトキャンパスに見られますように、大学がいかに

地域と密接に関わっているかという事例を紹介しました。こういう取り組みは、まことに大切に紹介したいと思います。この水戸の事例は、五十嵐徹也附属病院長

と一緒に、学長の力も大いに預かっていたと聞き及んでおりますが――。

**学 長** これは関係する多くの先生方や地元の行政、それを支持して下さった方々のお力があってこそ成功したのです。

**理事長** 地域との協力といえますと、大学は茨城県北にありますが、地域との結びつきとしては、学生のつぐば市役所への就職希望も沢山出ております。

またこの頃は、大学側の姿勢を理解して下さる地域が増えたせいでしょうか、大学の教員への協力依頼が増え参りました。そこで私は、そのような依頼があつた時には、ほかの仕事は出来るかぎり都合をつけてでも要請に応じて出席するようにと申しております。

とにかく、法人化されてからの大学は、地域と無縁であつては成り立ちませんから。

特に、筑波大学は、茗溪会が全国的に展開している支部組織にも見られますように、全国にネットワークを張りめぐらしている大学ですから、単に大学の所在地という地域的な縁を越えて、これからは「広範囲な地域」から、何かと頼まれごとが増えてくるのではないのでしょうか。忙しくなりますね。でも、嬉しい悲鳴は楽しいものです。

**理事長** 実は、このような取組みが、大学への新しい支援組織の実際のベースにもなるかと思えます。

**学 長** 同感です。  
**理事長** 連携強化という点から申しますと、私どもの茗溪学園がいま進めております「高大連携」という取り組みがございます。

茗溪学園は、茗溪会百周年の記念事業として創立された私立の中高一貫校です。

昨秋に、創立三十周年を記念する式典を、筑波大学の大学会館をお借りして挙行了しました。

筑波大学が、東京から離れて筑波の地に創設された当初は、いまも東京にあり、結局は東京と離れないことになり、それに代わる附属的な実験学校が

大学の近くに求められ、多くの関係者の尽力と県当局の理解ある図らいで、宿舍を設置した中高一貫教育の場として茗溪学園が当地に創立されました。そんな事情から当学園は、設立時からすでに「有名校」入りをしておりました。

とりわけ、今日ではどこでも行っており「個人課題研究」や「体験学習」という諸活動が、創立当初から本校の特色として行われております。

いままでも、筑波大学の体育関係や芸術分野のみならずからの指導をいただくという連携は強まって来ておりましたが、近年では、大学を会場にさせて頂いたり、理数科等、各分野での大学の教員や学生諸君による指導も受けておりまして、ますます「高大連携」の実が上がって参りまして、誠に喜ばしいかぎりです。

## 大きく羽ばたく

**理事長** 茗溪会が大学と連携協力している事業がもう一つございます。学生宿舍の管理運営という業務です。

筑波大学を新構想の大学として筑波の地に開学させたもう一つの理由に、学生には落ち着いた雰囲気や学問や研究に専念できることが必要だと思われたからと聞いております。

当時は世情が不安でもあり、人口の多い地域での教育や研究環境が不安定で、そのためにも筑波に広大な土地を求めて、好ましい環境を整えたのだといわれます。

しかし、広大なキャンパスは求められませんでした。特に、学生が日常を過ごす宿泊施設がありません。

時の大学関係者から相談を受けた茗溪会は、大学が直接に宿舍の管理運営をするよりは、大学の理念にも沿った第三の組織での運営が良からうということになり、当局の認可を受けて「筑波学都資金財団」を組織して管理運営に当たらせたとということで、私どもの財団と学生宿舍との関わりが出来たとのことでした。

**学 長** 私どももそのように聞き及んでおります。

財団には、学生の日常生活について、宿舍を建設して

以来、管理運営をお任せして安全で快適な生活を守っていただいております。

宿舍の学生が自主的に企画運営する活動の一つに「やどかり祭」というイベントがあります。私も前回は参加させてもらいました。これらの催しも、いくら学生の自主的な行事だとはいつても、管理事務所のスタッフのみさんの陰からの多大なお力添えがあつてこそ出来ることですので、私どもとしまして心から感謝しております。

しかし一方では、学生宿舍の建物も築三十年余を経ており老朽化も進んで参りましたので、少しずつ建て替えをはじめており、財団側にもご迷惑をおかけすることが多くなつて参ろうかと思ひますが、今後ともよろしくご協力の程をお願いします。

**理事長** これまたご案内のように、財団はもう一つの事業として、研修センターの経営がございます。

この研修センターでの純益の中から、学生諸君への助成金を拠出しております。

**学 長** これらの助成金は、学生たちの励みになつており感謝しております。

**理事長** さきほどのグローバルの話に戻りますが、グローバル化が進んで参りますと、学生宿舍への入居者のパーセンテージにもその影響が強く見えて来ております。現在、留学生の63%が入居者になつてきております。



西野理事長

**学 長** 実は、昨年初めてわが国の大学での国際化拠点整備事業として「グローバル30」の選定が行われ、このプログラムでの拠点大学に、全国に沢山ある大学のうちで十三の大学が、なかでも国立大学法人が七大学選ばれました。そのうちの一つにわが筑波大学が選定されました。

急速なグローバル化や世界の有力大学間の競争が激化する中で、わが国の大学が、学生の学習や居宅での快適な居住性の確保等をはじめ留学生受入の環境整備やいくつかの条件をクリアして、取組みを行うことに適当と認められた大学に対して、わが国政府が5年間にわたつて支援されるというのがこのプログラムです。

関連してお話しますと、わが大学には、中央アジア国際連携センターと北アフリカ地中海連携センターがあります。このうち、わが大学の北アフリカ・地中海連携センターが、8か所の海外大学共同利用事務所の一つとして国から指定されました。うちの大学としても、地中海と北アフリカとを結ぶところに拠点があるということ、は、当該地域、特に、アフリカの玄関口として重要だと思ひます。このセンターが共同利用事務所に指定されたということ、これは、私たちの先導的役割が公認されたということです。これまた、意義深いことだと思つております。

**理事長** そのようにグローバルな動きが活発化すればする程、ますます、学生宿舍の存在意義や重要性も増してくるということですね。

**学 長** その通りですね。

地元のつくば市としても、留学生のためのインフラ整備や町中での「国際化」を進めて来ておられますね。なおのこと、地域との一体化が急務です。

**理事長** 本日はお忙しい中にも関わらず、お邪魔致しまして、いろいろとお話頂き、筑波大学と茗溪会と一緒に参つて参るところを合わせ、大きな課題に取り組んで行くべきこの一年であるとの思いを強めた次第です。

今後ともよろしくお願ひをいたします。

**学 長** 学長室までわざわざおこし頂き、心楽しい一日でした。

有難うございました。

# 茗溪学園創立30周年

## 特集Ⅱ



式典で挨拶する西野理事長



学校法人茗溪学園は、茗溪会百周年記念事業として学園を創設することが決議され、昭和五十四年四月筑波の地に開校しました。

創立に当たって、茗溪学園には近代日本の教育の担い手として歴史を築いてこられた茗溪の諸先輩方の教育に対する熱い思いが凝集され、よりよい中等教育とは何かを問い直し理想を求めた学校をつくりたいという思いがあることを、私たちは強く感じていました。その心を受け継いで、さまざまな教育実践を行ってまいりました。

今年、節目の年を迎え、三十年を振り返り、次の時代に向けて新たな出発となるよう創立三十周年記念式典および科学シンポジウムなどの記念事業を行いました。

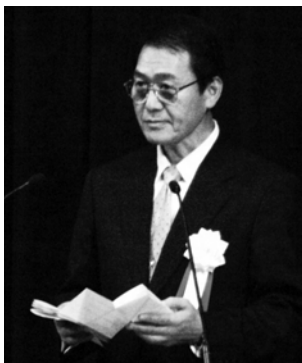
### 建学のこころざし新たに

茗溪学園 中学校 校長 柴田 淳

#### 記念式典

記念式典は、十月七日(水)午前十時より筑波大学・大学会館講堂を会場として行われました。オープニングとして、茗溪学園の変遷を映像で紹介しました。いくつかの節目となった年代の生徒たちが登場する映像は、新しい時代を築く在校生に向けての力強いメッセージとなりました。

西野虎之介理事長からは式辞で、人生でいえば青年期を過ぎ壮年期に入る節目であり、先代を超える「継承胚胎」を志す時期を迎えたというお話がありました。続いて、来賓としてお迎えした茨城県川俣勝慶副知事、筑波大学清水一彦副学長、茨城県私学協会廣瀬和喜会長の皆様からそれぞれ、学校の教育に対し、あるいは生徒に向けて温かい激励やご祝辞を頂戴いたしました。また、



柴田校長

来賓として、近隣高校や県内の私立学校の校長先生方、本学園を支えてくださいます父母会、後援会の役員の皆様、学園理事・評議員の皆様など、多くの方々のご臨席をいただきました。紙面をお借りしまして改めてお礼申し上げます。ありがとうございます。

当初の予定では、千六百席ある大講堂は、千四百六十名の生徒と、ご来賓の方々が満席となるはずでした。しかし、九月末より十月にかけて、本校は新型インフルエンザの猛威にさらされ、次々に学年閉鎖、学級閉鎖の措置を取らざるを得ない状況となり、式典への生徒の出席が半数以下となってしまいました。記念プログラムの中の科学シンポジウムは在校生に向けて企画したものであっただけに大変残念なことでした。

#### 科学シンポジウム

第一部の記念式典に続き、第二部として科学シンポジウムを行いました。「生命・科学・未来」というテーマのもと、次の四つの講演や発表を行いました。

① 基調講演 森 武俊先生(第5回卒業生)

演題 「東京大学大学院情報理工学系准教授」

② 招待講演 入江尚子先生(第20回卒業生)

演題 「少子高齢化社会を支えるロボット技術と科学の未来」

③ 個人課題研究発表 末永通己さん(本校高校三年)

演題 「知られざる動物の世界―象の自己認識能力と計算能力」

④ 総括講演 永田恭介先生

演題 「ウィルスは生き物? 手なずける方法は?」

司会 蛭原 哲氏

(筑波大学大学院人間総合科学研究科教授)

(日本テレビアナウンサー・第12回卒業生)

記念式典を開催するに当たり、本校教育の中で先進性として評価されているところを、さらに伸ばしていくための契機となるイベントとして、このような科学シンポ

ジウムを企画しました。その先進性とは「個人課題研究」のことです。研究者として活躍している先輩達の講演を聞き、筑波大学との連携によってこれからの個人課題研究がさらに発展していくことを在校生に感じ取らせたいという意図をもっておりました。

出席を依頼した三人の卒業生は、ロボット研究の最先端で活躍している茗溪初期の生徒だった森武俊さん、比較的新しい卒業生で、最近テレビでも取り上げられていた象研究の入江尚子さん、そして、日本テレビのアナウンサーとして活躍している蛭原哲さんです。在校生にとって卒業生は親しみやすい身近な存在です。中学一年生にも高校三年生にも、幅広く学んでいくことの楽しさを伝えるには、卒業生が登場することがより効果的なので、この三人にお願いしました。

在校生の発表は、内容的に高い評価を得ていた末永さんにお願ひしました。研究を進めるに当たって、校内の指導担当教員だけでなく、筑波大学の先生をはじめ複数の外部の方にご指導を受け、レベルの高い研究に仕上がっていました。

総括講演をされた永田先生からは、ウイルス研究のお話だけではなく、生徒に向けて、学ぶことの意義や進路選択のあり方など、示唆に富むお話をいただきました。この式典および科学シンポジウムは、筑波大学清水一彦副学長のご援助をいただいで開催の運びとなりました。

私どもの要望を親身になってお聞き届けくださり、本当にありがとうございます。

## 記念事業

ここで、記念事業の全体像をご紹介します。

これまでにも十年を区切りに記念事業が行われてき



記念式典で科学シンポジウム「生命・科学・未来」の講演、左上から森 武俊氏(東大准教授)、入江尚子氏(東大博士課程)、末永遙己さん(茗溪学園高校3年)、永田恭介氏(筑波大教授)

ました。十周年には高校管理棟に三階部分を増設しコンピュータを活用した教育が始まりました。二十周年では第二体育館を建て、体育授業や部活動の活動場所と活動時間を拡大させました。

三十周年では、本校が、学校全体の行事(式典など)、学年や教科での発表会を伴う活動、そして部活動などの学術・芸術・文化交流活動を、さらに発展拡大することを狙いとして次のような内容を目的といたしました。

- ① 講堂の建設Ⅱ文化芸術活動、講演会、式典などの場としての講堂を建設する
- ② 国際教育推進Ⅱ短期の交換留学(SOSEP)や交流活動を通じて、異文化理解、コミュニケーション能力の育成を図る
- ③ 筑波大学と連携(高大連携)Ⅱ本校が筑波大学の同窓会立の学校であること、また、大学が本学園のすぐ近くにある立地条件を生かして、連携した活動を積極的に行う
- ④ 個人課題研究のさらなる展開Ⅱ探究心を掘り起こし、すべての生徒に、より高い研究スキルを身につけさせる

⑤ 生命尊重の教育目標をより幅広く達成するため「生命・環境」をテーマとする教育活動の一層の展開を図る

⑥ 記念式典および科学シンポジウムの開催をする

⑦ 記念誌を発行する

これらのうち、筑波大学との連携、個人課題研究の一層の発展展開に結びつけて、式典および科学シンポジウムを行いました。

講堂建設については、中期的な資金計画を立てて、構想実現に向けて進めております。国際教育推進では、「SOSEP」が、今年度はイギリス、ニュージーランドの学校三校との間で行われます。

個人課題研究は、十二月に全員発表会を行い、下級生(高校一年)に見せたい優れた研究を、筑波大学・大学会館で二月に大学の先生の指導をいただきながら、大学の卒論発表会のような形で行うことにしています。

「生命・環境」をテーマとする活動は、茗溪会所有の農地を利用していただいて、よりよい活動となるよう計画を練っているところです。

## 世界に・未来に羽ばたけ!

この三十年間、それぞれに夢を抱いて入学してきた生徒達は、本校での生活を通して夢の実現に必要なスキルを養い、さらに大きく夢を膨らませ「世界に羽ばたけ茗溪生」というエールに送られて巣立って行きました。その数は六千名を超え、第一回卒業生は、四十代半ばとなり、中堅としてそれぞれの職業分野で活躍しています。

昨年は、本学園卒業生の宇宙飛行士の星出彰彦氏が話題となりましたが、多彩な分野で活躍する卒業生の活躍の様子を聞くたびに、個性豊かな生徒たちの集まった本校の、その個性をさらに伸ばす教育が実った結果なのだと感じるようになります。

大きな節目となる三十周年。私達は、諸先輩方が築いてこられた伝統の上に立って、更なる発展を求めて邁進してまいります。そして、生徒達が未来の夢を育む学校であり続けたいと思います。



茗溪学園の設立者である茗溪会の理事で、同じ筑波地域の住民として学園を見守ってくださる堀内昭三氏（茗溪学園理事）に三十周年の思いを綴っていただき、また、父母会会長として学園の教育に理解と協力をいただいている中川喜久治氏にご挨拶を頂戴しました。さらに、本学園の特色である個人課題研究から、昨年一月に発表された新倉由貴子さんに、取り組み方や研究の内容について寄稿してもらいました。

## 地域からみた茗溪学園の発展

茗溪会理事 堀内 昭三



去る10月7日筑波大学会館において挙行された茗溪学園の三十周年記念行事に出席し、多大な感銘を受けた。  
さて、経済のグローバル化は滔々としてとどまるところを知らず、世界は日々変化する激動の時代に突入している。大学も全世界を相手に競争していく激戦の時代に入っている事を痛切に感じられる。

筑波大学に於ても、「グローバル30」のもとに留学生を3倍増、英語の授業の拡充、世界中に拠点を設け、国際的に評価される研究・教育の確保を目指す。聞く。

これからは、世界の大学と優秀なる留学生の取り合いの戦いに参戦し、勝利をめざし、日々改革を図って行くことになろう。それには、まず地元である筑波地域でのしつかりした基盤を作り上げる必要がある、地域との連携、高大連携を提唱していることはうなずける。

マスコミに取り上げられる大学の世界ランキングなるものも、これまでのタイムズ誌等の評価の如き既存の権威を背景にただでは通用しない時代が来つつある。

全世界の各種の評価を常に注視する必要がある。インターネットで検索すれば、アジアにおける日本の大学のランキングにおいて、東大、京大に次いで筑波大となっているのも見つけられるが、日本の大学における国際化の取り組みを評価基準にすれば、理解できる。

これまでの国内だけの大学評価などはいずれ無意味になる時代が目前にある。日本の大学教育の国際評価を高めることは平和国家を維持し、世界に貢献するために最

も力を入れるべき事柄である。  
茗溪学園はこの地域にある筑波大学の準付属校との位置づけを目指すと考えている。

この地域にいる者にとっては、茗溪学園が日本中から優秀な人材を集め、筑波大学に優秀な学生を送り込み、筑波大学と茗溪学園が日々連絡連携を図り、この筑波の地が日本の国際的高等教育のメッカとして確固たる地位を一層確かなものにされん事を切に願うものである。

## 茗溪学園創立三十周年に寄せて

茗溪学園父母会会長 中川 喜久治



茗溪会百周年の記念事業として生まれました茗溪学園が、茗溪会諸兄のご指導のもと、すばらしい教育実践を展開されながら創立三十周年を迎えましたこと、誠におめでとうございます。

茗溪学園は地元地域に愛され、さらに国内外を問わず広範囲の地域から生徒が集い、ますます充実し文字通りの文武両道たる人間形成を行っております。そして、建学の理念にも見られる「人類ならびに国家に貢献しうる国際的な日本人を育成すべく」教育に当たる先生方と生徒たちが、毎日毎日を協力して充実した学園生活を繰り広げています。

これまでに六千名を超える子ども達がお世話になり巣立っていききました。現在もお世話になっている父母の一人として心からお礼を申し上げます。

私が茗溪学園を意識するようになったのは、平成九年中学入学の長女が、小学校四年生の時に母親が担任の先生との面談時に、「茗溪学園に進学を目指せるレベ

ル」とお聞きしてきた時からでした。以来、東京教育大学の同窓会である茗溪会が理想の中学高校教育を目指して設立した学校で、情熱と力量溢れる教師陣が集まっていることなどを多くの知人から教えられ、その度に我が娘の教育を託したいという気持ちが強くなりました。当時の田舎の土地柄としては、私立中学の受験はあまり例がなかったように思ったのですが、茗溪学園を受験させることにいたしました。そして、実際に入学した我が子を通じ、また私自身も父母会活動などでの先生方との関わりの中から、親としても大変刺激的な多くの体験をさせていただきました。気がつけば、四人の子ども達は全て迷うことなく茗溪学園でお世話になっています。二人は既に卒業しましたが、あと二人は高校三年と中学三年に在籍中です。私自身も六度目の父母会会長を拝命しております。

学園の特徴は、生徒一人一人がさまざまな行事を通して、幅広くより深く、体験したり実物に触れたりしながら学ぶことにあります。校外での調査活動と教室での高度な授業が組み合わされ、学年の進行と共に繰り広げられる活動が螺旋状に絡み合っておりレベルアップが図られ、そこに高度な専門知識と豊富な経験をもつ先生方が情熱を持って指導して下さることで、それぞれの生徒が六年間のスパンで（あるいは三年間で）自分の進むべき道の手がかりを自ら見つけ出して行くことです。

グローバル化の進展、経済環境、少子高齢化、環境問題、衛生問題など国際情勢が激動する現在、教育を取り巻く環境も、多くの困難を抱えているものと思われ、茗溪学園には、志を高く持つ私学として、建学の理念、教育、指導方針をこの困難な時代にあっても堅持していただきたいと強く願っています。

そのために必要なことは、父母会として学園要請にできる限り協力し父母会活動を通じて子ども達の教育環境を守っていくこと、いかなれば、父母の学園に対する強い支持がますます重要になってくると認識しております。茗溪会のみならず、今後とも学園に対してより一層のご支援、鞭撻をお願い申し上げます。



## 個人課題研究を終えて

私のテーマ「平安女流文学における

漢詩文の引用について

『枕草子』を中心として」

茗溪学園  
高校三年

新倉 由貴子

「平安女流文学における漢詩文の引用について」『枕草子』を中心として」

これが私の個人課題研究のテーマです。私は文学に興味があり、特に古典の授業が好きだったことと、一度原文で古典を読みたいという思いから、古典文学をテーマに一年間研究しようと思いました。

研究対象は、物語よりも作者の考えが直接的に書かれていると思われる随筆とし『枕草子』を選びました。『枕草子』の有名な章段ばかりを集めた本を読み始める

と、清少納言とその他の登場人物が、漢籍を引用して会話をしている場面が多いことに気がつきました。初めは、漢籍を引用した会話の意味を探っていこうと思いましたが、古典の授業で、漢籍は男性の教養であることを知り、女性である清少納言が漢籍の教養をどのように発揮したのか、それに対する当時の人々の反応がどういうものだったかを研究してみようと思うようになりました。

まず『枕草子』に引用されている漢籍の出典を調べ、清少納言が会話に漢籍を用いた時の周囲の反応を書き留めました。『枕草子』では、漢籍の知識をひけらかす清少納言に対して周囲は極めて好意的であり、その教養と機知で周囲を驚嘆させ、それを耳にした天皇までも感心させています。また、仕えた中宮定子も自ら漢籍を引用し、清少納言達と当意即妙なやり取りをしています。中宮定子を中心とする当時のサロンが、清少納言の漢籍の教養を積極的に引き出す環境にあったように見えました。

次に、清少納言以外の女性に漢籍の知識があることに周囲はどのような反応を示したかについて調べるため、清少納言と同時代の紫式部の『源氏物語』『紫式部日記』を読むことにしました。『紫式部日記』で紫式部は、漢籍を読んでいるところを侍女たちから批判され、漢文で書かれた『日本書紀』に詳しいことで「日本紀の御局」とあだ名をつけられ憤慨しています。そして人前では漢籍を読まず知識をひけらかすことを極力避けていると書いています。また、紫式部自身も清少納言を「利口ぶり漢字を書き散らし風流ぶる人」と痛烈に批判するなど、女性の教養に対して冷たい反応を示していました。

『源氏物語』の帚木の巻の「雨夜の品定め」で、手紙には漢字を使い、男性に漢詩を作ることを教える女性が話題になった時、「そんな女がいるものか」と聞き手が話し手を責める場面が出てきます。また、女性同士の手紙に漢字がぎっしりと書いてあることや、興に乗らない時に故事を混ぜた歌を詠みかけてくることは嘆かわしいなど、女性の教養に対してかなり厳しい意見を出しています。紫式部は、漢籍の知識ある女性に対する当時の人々の一般的な考えを登場人物に代弁させているのではないかと思われます。

紫式部が『白氏文集』に興味を示した中宮彰子に漢詩を教えたことや、それを知った道長が書家に漢詩を書かせて中宮彰子に与えたことを踏まえると、漢籍の中でも漢詩の教養は女性にもある程度は必要とされたようです。ただ、清少納言も紫式部も自らが漢詩を作る場面は見当たらないことから、漢詩を作ることは男性だけの教養であったと思われる。さらに『枕草子』のなかで天皇は、清少納言が『白氏文集』の漢詩を引用したときには褒めて、清少納言が『前漢書』を知っていることには驚いたことから、女性には漢詩の教養が求められて、『史記』や『前漢書』などの漢文で書かれた書物は女性の教養から外れていたと考えられます。

以上が研究のあらましですが、一月に行われた「個人課題研究発表会」では、漢籍が引用されている場面の説明は難しいので、章段のあらすじは簡潔に説明するように心がけ、また少しでも分かり易くするためにスライドは発話者ごとに色分けをするなどの工夫をしました。

発表後、生徒の一人から「難しかった」という感想を聞きました。用意した原稿が多すぎて発表時間の20分に収まらず、一部を飛ばしたため、十分説明し尽くせませんでした。限られた時間で、聞き手を惹きつけ、納得してもらえる発表をすることの難しさを痛感しました。

研究を終えた反省点として、結論を導くための根拠はほとんど『枕草子』『紫式部日記』『源氏物語』の三冊から探したので、当時の漢籍の教養に対する一般的な考えを裏付ける証拠に欠けていることです。

古典研究は、時代背景、歴史、文化など、多角的に知識を深めた上で取り組んでいくべきであることを学びました。

もう一点、『枕草子』に限らず、様々な古典を結局は現代語訳に頼って研究を進めることになってしまったことです。この点は、もともとの研究動機から離れてしまっていることでもあり、特に心残りです。

大学は文学部に進む予定ですので、今度こそ原文で古典の研究をしたいと思っています。

この研究を通じて、古典文学への興味と研究意欲がさらに増したことが一番の成果であったように思います。

## 第8回(平成21年)

# 茗溪会顕彰

11月27日に東京・茗溪会館で第8回の顕彰式と祝賀会を行いました。この事業は茗溪会の公益事業として行われているもので、今年度は、社団法人茗溪会顕彰選考委員会により、全国からの多数の候補の中から5団体と個人4人が選ばれました。顕彰対象は、地域社会にあって広く社会に貢献している青少年や一般社会人です。以下、今年度の顕彰の概略を紹介します。



### 団体

#### 北海道立静内農業高校 農業クラブ

代表生徒 金 諒眞 北海道

北海道遺産に指定されている約7キロメートルに及ぶ、静内二十間道路の桜並木の環境保全に取り組んでいる。農業クラブでは清掃活動はもちろん、専門家の指導による桜の樹木調査、病害虫の有無等の実態調査をして、貴重な保全資料として役立っている。町民との交流の場ともなり、町を挙げた協力体制もでき、地域社会の振興に貢献している。



#### NPO法人 つくばフットボールクラブ

代表 石川慎之助 茨城

つくばクラブはサッカーを通して地域の小中学生や高校生の健全育成にとりくむ。学生女子ではJリーグなどしこ入りをめざす。一方、日本サッカー協会のグリーンプロジェクトに参加。小中学生メンバーや父母、都内からのグループなどで、芝生のポット苗16万株づくりを推進。これらの苗は希望する各地の幼稚園、小中学校のグラウンドの緑化事業に無償で提供されている。



#### 下北沢落書き消し隊

代表 吉田 岡吉 東京

このグループは「様々な人たちが街を大切にしていくことを広く知ってもらう」ことが街の治安維持にも役立つと、誰でも参加できる活動として地元の人たちのほか、街に来る大学生、劇団員、若者達に呼びかけ、落書き消しや街の清掃活動などに参加する形で毎月の定期活動を10年継続。また、落書きを消すだけではなく、作品を残したい人を公募し、店舗のシャッターに絵を描いてもらうという活動も展開している。



## 来賓・学長<sup>代理</sup>の祝辞

昨今の社会情勢を見ますと、政治・経済・文化等あらゆる面において閉塞状況が進んでいるように思えます。そんな中で、今回顕彰の荣誉に輝かれた皆さま方は、さまざまな形で多くの人々の心に明りを灯し、夢と希望を与えてきたと確信いたします。また、このような貴重な顕彰事業を継続して行っている茗溪会には、心から敬意を表しますとともに、今後とも長く続けられるように切に念願するところで。

(要旨)



祝賀会での祝辞  
西川副学長

## 西野理事長の挨拶

顕彰の対象としましたのは、社会に貢献されておられる方々を、広く全国各地から推薦していただいたものです。今年度の顕彰の対象になられた方々は、ご活躍の場面も多方面にわたっておられます。私どもの顕彰事業も、社会貢献活動への働きかけのひとつにもなってきたかと思えます。また、そうした活動に尽される方々の層の厚さを実感しております。厳しい時代にあつて誠に感銘深いものがあります。

(要旨)



顕彰式での挨拶  
西野理事長

## 高齢化社会をよくする虹の仲間 手作り工房部門

代表 佐渡友順子 神奈川



手作り工房部門は、1983年に設立された「高齢化社会をよくする虹の仲間」の一部門である。高齢者や障害者が手仕事を通じて社会とのつながりを持つようになることを目指している。寄付された古い着物などを小物やスカート等に再生して、障害者施設のフェスティバルや地域のバザールなどで販売している。その収益はカンボジアのストリートチルドレンやモンゴルのマンホールチルドレンの支援金としている。

## 外国人のための電話通訳

NPO法人 愛伝舎  
代表 坂本久海子 三重



愛伝舎は、三重県や鈴鹿市からの委託事業として携帯電話のスピーカーホーンを使った通訳サービス（ポルトガル語、スペイン語）を実施している。いまでは、民間の領域にも活動範囲を広げ、外国人住民が日常生活で直面する諸問題の解決を援助するとともに、外国人住民との共生をはかり住みやすい地域社会作り大きく貢献している。

電話通訳を利用しませんか？  
全国どこからでもOKです！

例1. 保健所

A 「もしも？愛伝舎ですか？ポルトガル語の通訳をお願いします。」  
B 「はい、どうぞ！」  
B 「Eu quero que o médico me examine。」  
A 「診察をお願いします。」  
A 「どこか痛いのですか？」  
B 「Está doendo algum lugar？」  
A 「Como com doravante ja faz 2 dias。」  
B 「二日前から下痢をしています。」

## 個人

### 破片から埴輪を復元

松村 一昭 76 群馬



「馬に乗る正装の男子埴輪」を復元した。この埴輪は6世紀後半に造られたとみられ、高さ、前後とも約110cmである。1953年に伊勢崎市雷電神社跡古墳が土採りされる際に出土し、破壊されるところを松村氏が収集。10年前から本格的に復元する作業に一人で取り組み2006年に完成。群馬県立博物館等の鑑定の結果、今までに出土例がない重要文化財に値する貴重な埴輪と確認された。同博物館で今年夏に展示、公開された。





## 祝賀会では

顕彰式に引きつづいて祝賀会が開かれた。冒頭、西野理事長は、「社会貢献が生活の周辺にまで及ぶことで地域社会の質そのものが向上する」と挨拶。受彰者代表挨拶の吉田さんは、「下北沢の街が安心だからこの街に来たという声が増え、自分たちの活動の励みになっている」と述べた。乾杯のあと、顕彰を受けたすべての方々から活動を紹介された。地域での献身的な活動には、誰もが感銘を受け、お互いに励ましあう場面となった。また、ほのぼの寄席の笠羽さんからは、日頃人々を元気づけている落語を一席披露していただくひと幕もあった。

## スケート指導ボランティア

井上 則之 79 神奈川

井上氏は1963年、相模原市内の小学校児童の運動機能未発達の状態に直面し、スポーツ指導の必要性を痛感。以来、スケート愛好家とともにボランティアとして、10月から翌年5月の毎日曜日6・30〜8・30まで、数十名の小中高生から大人まで約200人を対象にスケート指導に取り組む。この間、26名の指導員、22名の準指導員を育て、指導者育成にも尽力している。また、ボランティア団体としてのスケート協会会長として、現在も子どもたちの健全育成に尽力している。



## ほのぼの寄席で元気づけ

笠羽明美さんと

その家族 神奈川

母 明美 53 全盲  
娘 美穂 26 肢体不自由  
父 廣夫 60

肢体不自由の美穂さんが小学生の頃、落語林家とんでん平さんの指導を受けたことから、全盲の母親と落語会を結成した。母は足となり娘は眼となり、以来15年にわたって福祉施設や各種イベント等で落語を披露してきた。介護だけだった父親の廣夫さんも「南京玉すだれ」を習得、実演。家族全員で障害を持つ人々と周囲の人々を元気づけている。

なお、廣夫さんは会社員勤めのときから二人の活動を支え続けてきた。



## 病院で笑顔を似顔絵に

戸谷 仁郎 65 愛知

戸谷氏は1973年愛知県豊橋市民病院内に理美容院開業。2001年、週刊朝日「山藤章二の似顔絵塾」の特待生に選ばれる。

この頃より本業の理髪業を続ける傍ら入院中の患者等を対象に笑顔の似顔絵を1000枚以上も描き続け、患者に気力を持つて闘病に取り組む力を与えている。また、子ども対象の文化体験教室（似顔絵教室）や一般対象の似顔絵教室の講師を務めるなど、地域の文化振興にも尽力している。



平成二十一年 「追悼のつどい」

9月12日開催

茗溪会では、明治18年（1885年）以来、平成17年まで、毎年「秋分の日」に神式で物故者の「合同慰霊祭」を実施してまいりましたが、平成18年からは、宗旨・宗派を超えた「追悼のつどい」を開催するように変更し、今年度が、その第四回にあたります。

昨年から本年夏までにご逝去された遺族の方々に連絡いたしましたところ、31家族、43名の参列をいただきました。本会からも理事多数が参列しました。

当日は「茗溪会館」二階に祭壇を設け、写真のみの参加の28名を加えて59名の遺影が飾られました。午前11時に開式され、参列者一同が遺影に黙禱後、西野虎之介理事長が「追悼の辞」を述べ、挨拶をしました。続いて来賓として筑波大学学長代理として西川潔副学長が挨拶されました。その後、一同が献花し、式を終りました。

12時からは会場を四階に移して「懇談会」が開催されました。西野理事長の挨拶に続き4人の遺族の方々からスピーチをいただきましたので、紹介（要約）いたします。



故 中澤 きみ様（昭和23女子農業教育養成所卒）

二長女 中澤ひとみ様

茨城大学に勤めていた母は昨年の今頃は闘病中で10月8日に死亡しました。亡くなった後に多くの人からお手紙をいただき、なかには般若心経を写経したものも送られました。母の生前のみなさまとの交際の様子がしのべれます。父も既に

亡くなっており、私は自由な身の上ですが、きっと私のことを見守ってくれていると思います。



故 坂間 利昭様（昭和27理一卒） 二夫人 坂間賀世子様

夫は昭和20年4月に陸軍幼年学校に入学しましたが敗戦を迎え、これからは「教育の時代」と考え高等師範に入学したと聞いております。高師では最後の卒業生ということで「しんがり会」と名乗っていたようです。東京都の中学の教員から指導主事となり、文部省の教科調査官・教科書調査官となり、最後は文教大学に移りました。いつも一人でいくつもの役を兼ねていた人でした。大学へ移ってからは少しゆつくりと出来たよう、大学の学生のボーリングやバレーボールの大会には「坂間杯」を出して、なごやかな雰囲気をつくりだしていたようでした。

故 阿形 明様（昭和29教大化卒） 二夫人 阿形 信子様

78才で亡くなりましたが、特許事務所の所長や茗溪会理事をはじめ数えきれないほどの仕事をしていた。

50年前にここ茗溪会館で結婚式を挙げ、今年が金婚式でした。

理科教育が衰退していることを嘆き、阿佐ヶ谷で小さな理科の実験教室

を開いておりました。

明方にお風呂に入る習慣があり、仕事に疲れていたこともあってか、4月27日にお風呂に顔を付けてしまいました。気がつくのが20分ほど遅れてしまったのが残念です。まだまだやりたい仕事がたくさんあったようで、無念だったろうと思います。

秋になったら若いころ二人で訪れた八幡平の紅葉を見ながら気持ちの整理をつけたいと思っています。



故 梅津真理子様（昭和31教大國語国文学卒）

二主人 梅津 彰人様

妻とは大学で同期でした。昭和31年卒業時は就職難の時代で、女性で学部卒だけでは高校への就職はむづかしく、はじめは多摩地区の中学校で教員となり、昭和38年に都立高校に移り、四つの高校に勤務して平成6年に退職しました。

退職後は海外旅行によく出かけていました。それも危険を伴うような地域が多かったようです。

昨年11月30日に、妻は自分の好きなソファに座って寝むり心筋梗塞でそのまま逝ってしまいました。

葬儀の日に葬儀社の方が、祭壇に小さな箱を置いてくれたのですが、それは「チョコレート箱」でした。「チョコレート」は教師にとっては最も大切なものの一つですので、故人は喜んだに違いないと思っています。天国でも教壇にたっているだろうと思うと、優秀な「茗溪会員」だったと褒めてやりたいと思っています。



# 茗溪会／秋の公開講座から

## 筑波と東京で開催



易く、ホールいっぱいとなった参加者に感銘を与えた。

朗読という文芸ジャンルを切り拓いた幸田弘子さんの公演は、茗溪会が公開講座を始めた初期から、東京と筑波で10回目になる。今回も参加者からの感想がたくさん寄せられた。

「日本人のあわれ、情の根源のようなものが伝わってきた気がします。」「源氏物語のことばの響きの優雅さに改めて感じ入りました。昨今の日本語の乱れを思うにつけ、ことば文化の継承者としてこれからも活躍ください。」

文芸公演・朗読

## 平安朝の女性像を

### めぐって／源氏物語から

女優 幸田 弘子  
フルート伴奏 福島 さやか

9月26日(土)  
筑波大学学生会館ホール

筑波地区では3回目となる幸田弘子さんの公演。

今回は、「平安朝の女性像をめぐって」と題して、源氏物語の朗読であった。源氏物語の原文と瀬戸内寂聴氏の現代語訳文とを交互に朗読し、フルートの伴奏も加わって、難解な源氏物語の世界も聴き

福島さんのフルートとのコラボレーションも新しい試みだった。

「すてきなメロデーと流れるような朗読がありがとうございました。目を閉じて聞いてみると、平安の頃の様子が見え物のように浮かんできます」「美しいフルートの音色が、平安のかな文字文学とうまくあっていて、とてもすてきでした。」

この日は高校生の参加も多く、次のような高校生らしい率直な感想も多数あった。

「すばらしい朗読でした。物語の世界がふわーっと頭の中に浮かびました。源氏物語に興味があったのでいい機会でした。フルートも音がすーっとして、聞いていてスッキリしました。」



音が美しかったです!」「凄かったです。源氏物語のイメージが変わりました。古典文学というだけで少し「ええッ」と思っていたのですが、面白いと思えました。読み方がとても丁寧で、聞きやすかったです。フルートの演奏も雰囲気ととても合っていて最高でした。」「現代語と古文が一つになっていて、現代語はわかりやすく、古語だから当たりが優しいのと、両方感じることができて楽しむことができました。」

## 黄色い大地に緑を

講演

講師 高見 邦雄

(NPO法人緑の地球ネットワーク事務局長)

10月10日(土) 茗溪会館

認定NPO法人「緑の地球ネットワーク」は、1992年設立以来17年にわたって、中国山西省大同市の周辺に広がる黄土高原の農村で、植林活動を展開している。

高見さんには、厳しい自然条件の中で、現地の人々との交流を通して、相互理解と信頼による緑化活動の成功や失敗を語っていただいた。

黄土高原では夏の雨期にゲリラ豪雨が集中する。植生が乏しいので、やわらかく腐食をふくんだ表土が流されて、ますます植物を育てる力がなくなってしまう。皮肉だが、雨が砂漠化を加速する。この地も秦の始皇帝の時代には50%が森林だったが、中華人民共和国成立の頃は2.4%にまで減った。羊や山羊の放牧や、原油価格の高騰で山の木が燃料になることも環境を壊してしまう原因になった。

そのように砂漠化した高原で、高見さんたちは植林活動に取り組んでいる。

傾斜地に植林するとき、整地したあと溝を掘って土を下手に積み上げ土手をつくり、その溝の底に松を植える。雨で土砂が流れるのを食い止める現地での古来



の方法だ。それでも枯れていくものも多い。そこで松の育苗に「菌根菌」をつかうことで、苗木は丈夫で強く2倍に伸びた。これは日本から持ち込んだ技術だった。これはいけるということでの育苗方法を実用化し、それが植林プロジェクトの成功を保障した。

この地方の小学校はぼろ校舎だった。小学校に附属果樹園をつかってアンズを植え、その収益を教育支援に使おうというプロジェクトを考えた。収穫が皆無の年もあったが、アワやキビなどに比べて5〜10倍の収入となった。

この作業に日本からボランティアで若手男女が来てくれた。スコップも手にしたことのない若い人が多かったが、その参加はものすごく大きな役割を果たしてくれた。ここは日



中戦争のときに焼かれてなくなった村がたくさんあったし、肉親を日本軍に殺された人もいた。だから現地の人は、日本人と一緒に木を植えることに気がすまなかったが、戦争に責任があるとは思えないという若い人がいっしょに仕事をするのが、人の心を溶かすのに役立ったのだ。今、アンズの花はたいへんきれいに咲いている。

この法人の代表で植物の専門家・立花吉茂さんは、「植林を成功させるには植物園をつくらう」と言った。植物園は、工業化以前の時代の最初の研究施設だった。地球環境が問題になる時代にそれに対処するいい方法を探すわけだ。それでつくったのが霊丘自然植物園。86ヘクタールのはげ山の100年間の使用権を購入し、近

くの村とも協議を繰り返して、「放牧しない、山に薪取りに入らない」などの約束をし、落葉広葉樹の育苗や試験栽培を行ってきた。この日の講座は、高見さんたちの生々しい現場での話であり、日中友好の架け橋となる活動としても感動を与えるものだった。



講演

## 日英ことば遊び入門

講師 藤原保明

(筑波大学名誉教授)

10月25日(日) 筑波研修センター

藤原教授の茗溪会での講演は、前回の「誰が英語をつくったか」に続く第2弾である。

今回は、日本語と英語を比較して、両言語に共通する「ことば遊び」のおもしろさを存分に語られた。

ことは遊びとしてとりあげたのは、まず「回文(めぐらしぶみ)」であった。回文とは、日本語では「たけやがやけた」のように上から読んでも下から読んでも同じ文となる文章だ。日本語での傑作は、新年の宝船の絵に書き添えられた歌

「長き夜の遠(とお)の眠り(ねぶり)の皆目覚め浪乗り船の音の良きかな」がある。俳句でも芭蕉作との説もある句「長崎のどかな門(かど)の焼き魚(やきさかな)」がある。

中国語では、蘇東坡に次の詩がある。春晩落花余碧草(春晩落花碧草を余し) 夜涼低月半枯桐(夜涼低月枯桐に半ばす) 人随遠雁辺城暮(人は遠雁に随う辺城の暮れ) 雨映疎簾繡閣空(雨は疎簾に映じて繡閣空し) この詩をすべてひっくり返すと、押韻ははずれるが、全体として解釈可能な完璧な詩となる。

次のような意味になる。「誰もいない高殿の美しいすだれはまばらに編まれていて、雨に映える。夕暮れの町の国境を飛ぶ雁が遠くまで人について行く。桐は枯れて半月が涼しい夜の空に垂れている。草は青々として、残った花が晩春に散って行く。」

さて、英語の回文では *dad*(おとうさん)、*eye*(目)、*radar*(レーダー) などがあるが、ナポレオンがエルバ島へ流されたときのことは回文になっている。

*Able was I ere I saw Elba.*

「エルバを見る前は私は強かった」。

また、*Snug & raw was I ere I saw war & guns*

「戦争や大砲を見る前は、私は不自由なく未熟だった」というものもある。

日本語では語列をひっくり返しても音+母音の順序が変わらないので回文が作りやすい。英語では、*[h,i,r,w]* という子音は語頭にのみ生じる。また、*king* や *sing* など語末に生じる鼻音 *[ŋ]* は語頭に生じない。母音の前と後では子



音の連結の型は必ずしも同一ではない。これらの英語の制約により、語順を逆にしたとき英語では認められない音連続が生じる。ところが日本語は、仮名の発明により音節文字となったことから、ことばが概念を簡潔に表現できる。仮名が短歌や俳句の世界を豊かにし、ことば遊びでは芸術的で高度な世界を開かせたといえよう。

藤原先生は、「なぞなぞ」についても興味つけない例を豊富に紹介された。日英のことば遊びの比較の中から、それぞれの時代背景、当時の人々の文化や教養や嗜好を感じ取りながら、日本文化の持つ知的水準の高さと内容の豊かさを認識する講演となった。

参加者から、「もつと深く言葉（日本語）のことを知りたくまりました。」「日本のなぞなぞの解答までに要する知識と教養の質の高さに驚きました。」「人間の面白さや素晴らしさが言葉にあることを改めて知りました。」「時代や国境を越えた人々のクリエイション力、イマジネーション力に感銘。」「などの感想が寄せられた。



講演

## 地雷被害国を安全な機械除去で援助しよう

子どもたちの救済／難民と

退役軍人の職業訓練

講師 中込 璋

(JICA個人コンサルタント)

11月14日(土)

筑波大学国際会議室

世界の紛争地域における対地雷除去活動による子どもたちの救済、難民および退役軍人の職業訓練など、国際貢献活動に尽力されている中込璋（あきら）さんに話していただいた。

世界の紛争地域では、戦争の後々まで地雷に苦しめられている人々がいる。建設機械の開発に携わってきた中込さんは、カンボジア出張のとき、立ち寄った病院のベッドに、地雷で片足をなくして苦しんでいる何人もの幼児がいるのを見た。

「こんな地獄のようなことがあっていいのか」と感じた中込さんは、「何十年も生き続ける悪魔の兵器」を根絶するために、対地雷除去機の研究に取り組み、機械化に成功した。

いま、インドシナ地域やアフガニスタン、ニカラグアなどで、数十万台が活動している。

講演では、ビデオで中込さんの活動を紹介し、また、地雷やクラスター爆弾、地雷除去機の模型、さらに地雷除去に関する多数のパネルを展示して、ひとつひとつ丁寧な解説をされた。

地雷とは何か。第一に、それが悪魔の兵器であり、疲れを知らない卑怯者であること。すなわち地面下1センチのところで人が踏みつけるのをじっと待ち、

50年以上の寿命がある。第二に、無差別兵器であること。普通の兵器は相手に向けて目的を持って使用されるが、地雷はだれでもいい、踏んでもれる人を殺傷する。被害者は2割が軍人、8割は民間人で、その30%は子どもだ。第三に、地雷を持つ国190カ国のうち地雷廃絶会議に入っている国は150カ国。



査。地雷はプラスチック製のため金属探知機が使えない。そこで人間の300倍も嗅いをかぐことのできる探査犬を使う。そして200個ほど見つかった地雷除去機をフル回転させて爆発させていく。

地雷一つ作るのに200〜400円、一つ除去するのに10〜20万円の費用がかかる。地雷除去の機械化で除去作業は300倍のスピードをあげることができた。最も数が減っているのはカンボジアだが、地雷ゼロとなるには、今後100年はかかる。中込さんはカンボジアでゼロになったこの仕事をやめようと思

う、と言われた。その他、地雷のいろいろな種類やクラスター爆弾、原爆のような症状の出る劣化ウラン弾などの小型爆弾のお話があり、最後に中込さんの

現地での職業訓練の仕事について話された。

参加者から「信念・信条」を問われた中込さんは、「まず現地を見ること」そして「かわいそう」と思うことと答えたのが印象的だった。